

2018年のノーベル医学  
生理学賞が本庶佑京大特別  
教授(76)に贈られることが決  
まった。21世紀は日本の受賞  
者が続き、日本人は26人目。  
近年の受賞傾向について、医  
師で日本学術会議会長などを  
歴任した黒川清政策研究大学  
院大名誉教授(82)に聞いた。

2018.10.25 中国新聞社 (セレクト)

選考するスウェーデン側の  
念頭には、共同受賞者のジェ  
ームズ・アリソン米テキサス  
大教授(70)があつただろう。  
だが、本庶氏が開発に大きく  
貢献したがん治療薬「オプジ  
ーボ」の成果を待って決めた  
のではないか。近年の傾向を

## ノーベル賞 社会への功績重視か

みると「社会に役立つ功績」  
への強い意識がうかがえる。  
ノーベル賞が始まった19  
01年に受賞したのは科学的  
な新発見をした人だった。医  
学生理学賞はジフテリアの血  
清療法を研究したペーリン  
グ、物理学賞はエックス線を  
発見したレントゲン。初期は  
そういう傾向だ。

冷戦で国際政治の緊張が一  
気に高まった50〜70年代は、  
受賞者も米国とソ連の balan  
スに配慮していたようにみえ  
る。人口1千万人に満たない、  
小国スウェーデンのサバイバ  
ルの知恵だろう。  
そして現代。人類は温暖化、  
人口急増、疾病など地球規模  
の課題に直面している。好奇  
心に駆られて自然の不思議を  
探るより、社会的なインパク  
トに強い関心が集まる。

### 黒川清元学術会議会長に聞く



くろかわ・きよし 1936年  
東京都生まれ。米カリフォル  
ニア大教授、東京大教授など  
を経て2017年から政策研究大  
学院大名誉教授。日本学術会  
議会長、国会福島原発事故調  
査委員会委員長を歴任した。  
専門は内科学。

2014年の物理学賞は、  
地球温暖化対策に貢献する青  
色発光ダイオード(LED)  
を開発した中村修二・米カリ  
フォルニア大サンタバーバラ  
校教授ら3人。15年の医学生  
理学賞は熱帯感染症の特効薬  
を開発した大村智北里大特別  
名誉教授らだった。解決しな  
ければならない地球規模の課  
題は何かとのメッセージだ。  
オプジーボは医療財政を圧  
迫する高額な薬だ。最近は、  
治療1回当たり5千万円を超  
えるがん治療薬も出てきた。  
米国は元々、受けられる医療  
と経済力が直結する制度だ  
が、日本や欧州ではそうはい  
かない。高額医療について議  
論をしなければならぬとの  
メッセージも読み取れる。  
分断をおおるトランプ米大  
統領、メディアへの不信任感、  
躍進する極右政党……。世界は  
混沌として、明日は何が起き  
るか分からない。ノーベル賞  
を通じて、スウェーデンが打  
ち出す次の一手は何だろう  
か。